

特別展「2017年の自然遊学館の出来事」

場所：貝塚市立自然遊学館多目的室

期間：2018年3月1日～4月8日

2017年の自然遊学館の出来事展を開催するに 当たって

平成5年10月に建てられた自然遊学館は今年で24年を過ぎました。昔、当会場（多目的室）は雨漏りがひどく、天井にはたくさんの雨染みがあり、天井板が破損しているところもありました。そんな状況も自然遊学館改良工事で修理され、雨漏りの心配から解放されました。

当館の主な事業は調査研究活動、展示普及活動、維持管理活動の3つです。少し付け加えると、調査研究には大阪府から委託を受けて行う近木川汽水ワンドの経過観察があります。さらに展示普及活動には船の科学館からの助成金で行う海の学び活動があります。

調査研究活動は開館当時から続けている貝塚市全体の自然の観察・調査です。その結果は季刊誌『自然遊学館だより』や研究報告書『貝塚の自然』でお届けしています。

『近木川汽水ワンド』の生きものの観察・調査は平成24年から府の委託を受け行っていました。平成28年で一旦終了しましたが、まだ観察が必要との判断から現在1年更新で観察を続けています。

展示・普及活動事業では、自然観察会として多くの行事を行っています。従来行事に加え、船の科学館の『海の学びミュージアムサポート事業』が加えられたことで、人気行事が増えました。海の学びミュージアムサポート事業については、今回は、アンケートなどを、まとめとして少しだけ展示しています。他にも出前授業や各事業所、教育機関から依頼を受けて行う観察会への講師派遣、さらに、各学校からの団体見学や職場体験の受け入れを行っています。

以上の報告を『自然遊学館の出来事展』として皆様にお届けできることは、この場が当館のことをさらに深く理解していただける場になると確信しています。自然遊学館には、自然に親しみ、自然を大切にする心を育てる仕掛けがたくさんあります。今後とも来館された皆様がゆっくり見学していただけるよう努めてまいります。

特別展「2017年の自然遊学館の出来事」

～ 2017年の貝塚市の自然の記録と遊学館の行事を振り返ります ～



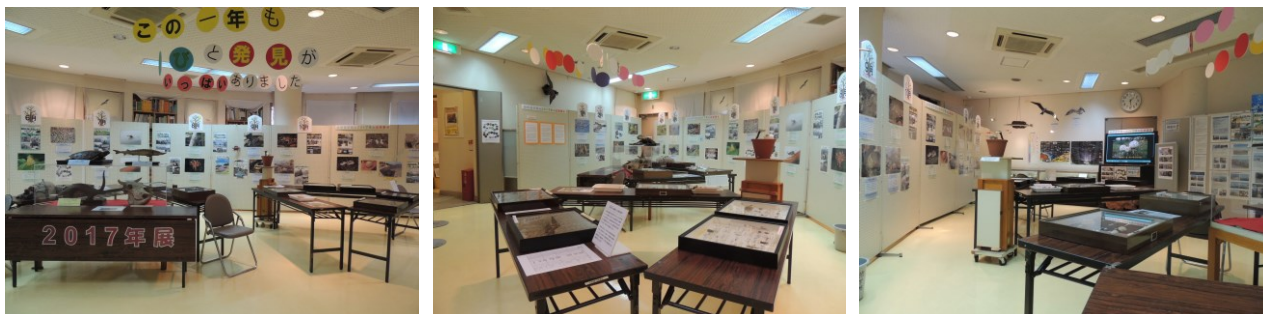
場所：貝塚市立自然遊学館多目的室
期間：2017年3月1日(木)～4月8日(日)

貝塚市二色3丁目26-1 水鉄バス「市民の森」バス停下車徒歩1分
Tel. 072-431-8457 火曜日は休館日です。ご注意ください。

今回展示している個々の生きものの記録の説明を読むと、観察会での発見や、皆様からの情報提供がいかに多いかが分かっていただけたと思います。『自然遊学館の出来事展』の開催に際し、多くの皆様にご協力をいただきましたこと厚く御礼申し上げます。

2018年3月
貝塚市立自然遊学館
館長 高橋 寛幸

展示会場の様子



展示項目

1. 写真と解説文

2017年1月から12月までの主な出来事（生きものの記録と行事）の写真と解説
次のページ以降に、生きものの記録と解説文を掲載しました。

2. 動画集

2017年に撮影した貝塚市の生きものに関する動画（画像集も含む）12本を、大型モニター上で再生しました。

3. 寄贈標本等

2017年に採集された標本や寄贈標本を展示しました。一部、2016年と2018年の寄贈標本も展示しました。

4. 海の学びミュージアムサポート報告

「海の学びミュージアムサポート」（日本財団）からの助成を受けて行った活動の報告とアンケートを展示しました。

1. 写真と解説文

以下で紹介する生きものと行事の写真は、行事で行った市外のものを除いて、すべて貝塚市内で撮影されたものです。それぞれの出来事について、タイトル、撮影日、撮影場所、1行コメント、分類群（目と科）、解説文、写真、撮影者を示しました。撮影者名がない写真は自然遊学館の職員が撮影したものです。

クロガモ・・・2017年1月2日、近木川河口

20年ぶりの記録

カモ目 カモ科

たびたび鳥の情報を頂いている藤村雅志さんが撮影した、近木川河口に来たクロガモのメス幼鳥の画像です。周りにたくさんいるのはホシハジロです。クロガモの記録をさかのぼると、飯田政治さんによる1997年1月31日のメス1羽以来、20年ぶりのことになりました。その間、環境省がまとめているガンカモ類の生息調査でも、近木川河口での記録はありませんでした。



クロガモ
(藤村雅志さん撮影)

ニホンザル・・・2017年1月13日、馬場～稲谷

昼間に堂々と

サル目 オナガザル科

「大阪府立少年自然の家」の久保元嗣さんが、自然遊学館に鳥の死体を寄贈しに来てくれる途中に出会ったそうです。市内での目撃情報はチラホラとあり、貝塚市の哺乳類リストに含めてきましたが、撮影記録はありませんでした。たわわ近く道路脇の柵の上を歩いている動画も寄贈していただきました。玉玉の付いた立派なおすで、群れからはぐれたものだと思います。



ニホンザル
(久保元嗣さん撮影)

テナガダコ・・・2017年2月2日、二色の浜

貝塚の海では初記録

タコ目 マダコ科

川口博さんから二色の浜に打ち上げられたものを寄贈していただきました。死んで間もない状態で、色素胞はまだ活性を持っている状態でした。名前の通り、腕が長く、特に第1腕は全長の8割を占めます。近木川河口や二色の浜ではタコと言えばマダコなのですが、テナガダコは初めての記録となりました。浅い穏やかな海の泥底に深い穴を掘って棲んでいるそうです。



テナガダコ

ヘビヌカホコリ・・・2017年2月27日、千石荘

網目模様になる粘菌

ケホコリ目 ケホコリ科

粘菌（変形菌）は変形して移動する変形体と、動かないキノコ様の子実体という、異なる姿を持っています。写真は子実体の方です。キノコ図鑑を見て載っていない時は、次に粘菌図鑑を調べます。この種は、伸長と分岐を繰り返して網目模様になります。幾何学模様ができる理屈です。中に詰まっている胞子が黄色で、それを包む嚢は透明、変形体の時は白色だそうです。



ヘビヌカホコリ

フキ・・・2017年3月16日、三ヶ山

ややこしい雄花と雌花

キク目 キク科

春に地下茎から花茎を伸ばして地面に出たものが「フキノトウ」です。写真は更に伸びた雄株です。野草としては珍しくフキは雌雄異株で、雄株と雌株があります。花にはおしべとめしべがあり、・・・と習った雌雄同株ではありません。雄株に咲く雄花は黄色がかっていて、両性花と同じくめしべも備わっているのですが、そのめしべは種子を作る機能が失われているそうです。



フキの雄株

ユキワリイチゲ・・・2017年3月28日、蕎原

春の訪れを告げる花

キンポウゲ目 キンポウゲ科

アネモネの一種で、蕎原の近木川沿いの林床に幾つか群落があります。春先だけ地下茎から花茎が出ます。この日は、たくさんの花が咲いている写真を撮ることができました。この花を見ると、春が来たなと思います。覚野良子さんからは、1月中旬に開花情報を頂いていました。大阪府レッドリストでは、準絶滅危惧に指定されています。



ユキワリイチゲ

ドロハマキチョッキリ・・・2017年4月25日、和泉葛城山

タマムシではないけど玉虫色

コウチュウ目 オトシブミ科

タマムシのように緑色と赤色などの光沢を持つ甲虫はそこそこいるので、市内でも既に確認済みだと勘違いして撮影していました。メスは、イタドリ、ドロノキ、カエデ、コナラ、ブナなどの葉を巻いて、そこに産卵するそうです。この中で、名前の由来になったドロノキは、北海道から中部地方に分布する樹木で、貝塚市内では確認されていません。



ドロハマキチョッキリ

オオアメンボ・・・2017年5月7日、トンボの池

見慣れない大きさ

カメムシ目 アメンボ科

トンボの羽化殻を数えていた時、水面に大きなアメンボを見つけました。「トンボの池」のアメンボと言えば、まずアメンボとヒメアメンボです。オオアメンボは、市内ではこれまで馬場や木積より山側でしか記録されていません。「トンボの池」に春先に一瞬だけ訪れたことがあるコセアカアメンボもそうですが、良い生息場所を探し回っていて、たまたま立ち寄っただけかもしれません。



オオアメンボ

ナルトビエイ・・・2017年5月8日、近木川河口

温暖化で増えている？

トビエイ目 トビエイ科

もともと南日本の沿岸に生息していたものです。近木川河口でエイと言えばアカエイですが、このナルトビエイも目撃・撮影されたことがあります。その死体が初めて近木川河口に打ち上がりました。尾が長いことと口先の吻が尖っていることが特徴です。貝類を大量に摂食するため、駆除の対象になっている地域もあります。奈留は長崎県五島列島の島で、最初の発見地だそうです。



ナルトビエイ

ブナノホソツクシタケ・・・2017年5月11日、和泉葛城山

ブナの殻斗からニョキニョキ

クロサイワイタケ目 クロサイワイタケ科

登山道や山頂で時々お会いする吉田元三郎さんに「落ちたブナの殻斗からこのキノコが生えている」と教えてもらいました。自然遊学館に持ち帰って置いておくと、さらに伸びて、もじゃもじゃな感じになりました。館内には、2004年に採集された標本が展示されています。それは1本がまっすぐ伸びたものでした。大阪府レッドリストにおいて準絶滅危惧に指定されています。



ブナノホソツクシタケ

トラフトンボ・・・2017年5月15日と17日、馬場

珍しいトンボの珍しい瞬間

トンボ目 エゾトンボ科

絶滅危惧というほど珍しくはないのですが、自然遊学館の記録では、市内で55年ぶりの確認となりました。5月15日に藤村雅志さんがオス成虫を撮影し（メス成虫も確認）、佐々木敏夫さんに情報を知らせ、2日後にメス成虫が卵塊を付けている珍しいシーンに出会うことになったそうです。その卵塊が産み落とされていれば、幼虫がふ化して、成虫がまた現れるかもしれません。



トラフトンボ
(佐々木敏夫撮影)

ウラナミアカシジミ・・・2017年6月15日、蕎原

やっぱりいたか！

チョウ目 シジミチョウ科

樹木で囲まれた小さな広場で赤色のシジミチョウが、数匹舞っていました。止まった時に翅の裏側を見ると、網目模様があり、これまで当館の記録になかったウラナミアカシジミだと分かりました。近隣の市では記録があり、貝塚市にもいるはずだと思っていた種です。貝塚市産81種目のチョウ類となりました。幼虫の餌植物は、クヌギ、アベマキ、ウバメガシなどです。



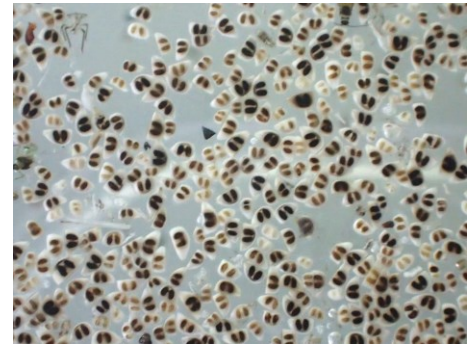
ウラナミアカシジミ

ミジンコの耐久卵・・・2017年6月29日、畠中

植物の種かと思ったら

ミジンコ目 ミジンコ科

プール開き前の清掃時にたくさん水面に浮いていたものが自然遊学館に持ち込まれました。てっきり植物の種子だと思い込んで、植物図鑑を見たり、植物の専門家に聞いてみたりしましたが、さっぱり分かりません。後日、大阪自然史博の石田惣さんが、以前の特別展「植物のたね」の解説書の中に同じ写真を見つけ、*Daphnia* 属のミジンコの耐久卵だと判明しました。



ミジンコの耐久卵

チビイトマキヒトデ・・・2017年7月9日、二色の浜

7腕は超レアもの

アカヒトデ目 イトマキヒトデ科

二色の浜での観察会で採集されたものです。体長2cm。普通は5腕で、6腕でさえ珍しいのに、なんと7腕もありました。発生の過程での細胞分裂の際に「何か」が起こったのでしょうか。ふつうヒトデの仲間は卵から孵ってプランクトンとして浮遊生活を送るのに、このチビイトマキヒトデは、すぐに親と同じように「這いまわる」生活を送る点でもユニークな存在です。



チビイトマキヒトデ
(同一個体の表裏)

カタオカハエトリ・・・2017年7月11日、和泉葛城山

小さいけど目立っていました

クモ目 ハエトリグモ科

オスは成体になっても体長3mmとハエトリグモ科の中でも小さい方ですが、橙色の第1歩脚と触肢を上下させる行動を取り、とても目立っていました。館内に持ち帰っても、お祈りかダンスのように見える、この求愛行動を続けていました。自然遊学館の貝塚市産クモ類標本で、90種目ということになりました。(写真による確認も含めると91種目になります)



カタオカハエトリ

オオトラフコガネ・・・2017年7月13日、和泉葛城山

模型のような模様

コウチュウ目 コガネムシ科

綺麗な甲虫を捕まえると、年甲斐もなく嬉しいものです。トラフと名の付く虫は、虎のように黄色と黒色の模様をしていて、オオトラフコガネも同様です。特に横から見た配色は、模型のように美しいと思います。図鑑の中でもよく目立つので、すでに自然遊学館に標本があると勘違いしていましたが、これが初記録となりました。成虫は花の蜜を摂食します。



オオトラフコガネ

ミンミンゼミ・・・2017年8月17日、蕎原

木に止まった写真が撮れました

カメムシ目 セミ科

夏の午前中、近木川上流沿いの林道を歩くと、ミンミンゼミの鳴き声が聞こえます。鳴き声を聞いたたびに、ピッタリの名前だと思えます。でも、姿はなかなか見ることができません。自然遊学館の標本になったのも、死体や弱って地面に落ちていたものが大半です。この日は早朝に蕎原に行き、幹の低い場所、ほぼ目の高さで鳴いているオスを写真に撮ることができました。



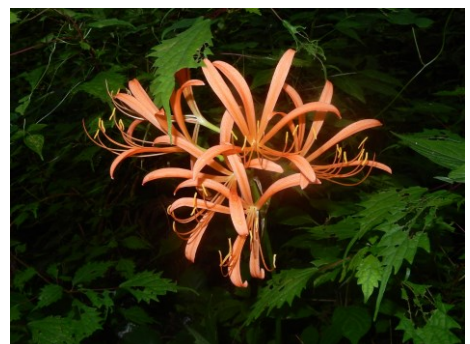
ミンミンゼミ

オオキツネノカミソリ・・・2017年8月17日、蕎原本谷

オレンジ色の目立つ夏の花

ユリ目 ヒガンバナ科

いつも植物の情報をいただいている覚野良子さんからマネギグサ（シソ科）の開花の知らせをいただき、本谷を登って行く途中に、スギ植林の林床で、オレンジ色がとても目立っていました。花卉が長く、おしべがさらに長いという特徴があります。この植物も2016年に覚野良子さんに教えていただくまで、自然遊学館の記録になかったものです。



オオキツネノカミソリ

チャイロマルハタ・・・2017年9月7日、近木川河口

大阪湾初記録！

スズキ目 ハタ科

NPO 法人シニア自然大学森と海の自然科の方と一緒に行った地曳網で、体長7cmの幼魚が1匹採れました。太平洋沿岸には生息していますが、大阪湾では初記録となりました。自然遊学館の海水槽でしばらく飼育していると、沈下性の人工餌を食べてくれるようになりました。でも、遊泳魚と違って、餌ねだりの行動はほとんど取らず、1個食べては組んだ石の隙間に隠れます。



チャイロマルハタ

セグロチョウチョウウオ・・・2017年9月8日、二色の浜

奮闘の末、貝塚市初記録

スズキ目 チョウチョウウオ科

寺田拓真さんが岩の隙間に隠れる幼魚を、「約1時間の奮闘」で採集してくれたものです。背側後方の大きな黒斑と目を通る黒帯が特徴です。本来、中部太平洋からインド洋にかけての暖かい海に生息するもので、本州に来るのは珍しいことです。海が暖かくなっているせいか、二色の浜でも南方系の魚を見ることが多くなりました。



セグロチョウチョウウオ

アユ・・・2017年9月23日、近木川下流、新井井堰

行事としては3年ぶり

キュウリウオ目 キュウリウオ科

今年の夏は特に雨が少なく、毎年行事を行っている堰堤の下でも細々とした流れが1本しかありません。アユの魚影も確認できず、今年もダメかなと思い始めたころ、投網に1匹、2匹と掛かり出し、合計6匹が採集できました。水質が改善して以降、2005年の調査で1匹、2011年、2013年、2014年と同所の行事で確認され、2015年は少し上流側の堤で確認されています。



アユ

ツチガエル・・・2017年9月28日、蕎原

20年ぶりの記録

カエル目 アカガエル科

同じく「イボガエル」と呼ばれることのあるヌマガエルは市内各所でそこそこ見かけるのに、ツチガエルの方は2009年以降、市内の記録が途絶えていました（腹をひっくり返して白色だったらヌマガエル、灰色のまだら模様だったらツチガエルです）。その間、2014年に『大阪府レッドリスト』が改訂され、トノサマガエルとともに、準絶滅危惧種に指定されました。



ツチガエル

ルリハツタケ・・・2017年10月19日、蕎原

今年は豊作？

ベニタケ目 ベニタケ科

ベニタケの仲間でありながら青色のキノコで、傘にある輪の模様が特徴です。2015年の秋に天満和久さんが見つけた群落ですが、2016年は見ることはできませんでした。でも、2017年は、全部で30本程度が出ました。アカトンボの仲間なのに青色のナニワトンボと関係が似ていますね。ルリハツタケもナニワトンボも大阪府レッドリストで絶滅危惧Ⅱ類という点も同じです。



ルリハツタケ

スッポントケ・・・2017年10月31日、千石荘

何の卵？

スッポントケ目 スッポントケ科

ケヤキの広場に撒かれたウッドチップ上に、手のひらに収まるぐらいの玉が何個か鎮座しているのを見つけました。それだけだったら何か分からなかったと思います。その周囲で、割れかけたものや、茎が伸びたものを見つけてスッポントケだと分かりました。館に持ち帰った玉からは、茎が伸びて、先端部のグレバから例えようのない臭気が広がりました。



スッポントケ

チゴガニ・・・2017年11月3日、近木川汽水ワンド

台風による大水の後に出来た干潟で

十脚目 スナガニ科

10月21日の夜に最接近した台風21号は大量の雨を降らせました。汽水ワンドにも大量の水が流れ込み、渦巻いていました。数日後に見に行くと、中央に干潟が出現していました。外枠の完成後、5年以上経過してもほとんど堆積する兆候もなかったのに。その後、汽水ワンド内で初めてチゴガニが巣から出てくる様子や、カモ類が水底から採餌する様子が見られるようになりました。



チゴガニ

イカタケ・・・2017年11月10日 千石荘

12本足のイカ？

スッポントケ目 スッポントケ科

毎月第2金曜日に行っている千石荘講座で、佐々木仁さんが見つけたものです。図鑑で見て忘れないでいたのは、名前とイメージが合っているからでしょう。本当のイカより2本多い12本足でしたが、本数には6本から16本ぐらゐまで変異があるようです。図鑑にも珍しい種と書かれていて、大阪府レッドリスト2014では絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。



イカタケ

マルハラダニ属の一種・・・2017年11月23日 馬場

小さいけど肉食

ダニ目 マルハラダニ科

毎年、文化の日の祝日に、自然遊学館わくわくクラブが馬場たわわの小池の清掃をしています。その時に池の生きもの調べもします。今年は水生生物の専門家の森本静子さんがミズダニの一種を見つけました。ミズダニは水生ダニの総称で、いくつかの科に属しています。数ミリのサイズですが、成体は肉食で、水生昆虫の小さな幼虫などを摂食します。



マルハラダニ属の一種
(森本静子撮影)

ダツ・・・2017年12月4日、近木川河口

危険さが分かる尖った顎

ダツ目　ダツ科

食野俊男さんが全長91cmの大物を釣り上げて持ってきてくれました。自然遊学館に貝塚産の記録がなかった魚です。細長い体と、上下の顎が尖っているのがダツ類の特徴です。ダツが群れで小魚を追っている様子を想像すると、少し怖い感じがします。光に突進する性質があり、夜に海に向かってライトを照らす時には注意が必要です。



ダツ

ビンズイ・・・2017年12月31日、近木川河口

冬鳥ではなく漂鳥

スズメ目　セキレイ科

カモ類の動画を撮影していたら、すぐそばに止まって、羽づくろいを始めました。ずっと続けていたので、虫などにたかられていたのかもしれませんが。あまり見かけない鳥で、以前、1月の写真を寄贈してもらったことがあったので、冬鳥だと思っていました。でも、区分としては漂鳥で、山の鳥というイメージがありますが、冬は平地の松林などにも現れます。



ビンズイ

2. 貝塚市の生きもの動画集

2017年に貝塚市内および自然遊学館内で撮影された生物の動画（画像集も含む）12本を、幅108cmの大型モニター上で映しました。これらの動画は、youtube上にアップした再生リスト「貝塚市の自然」に含まれるものです。その再生リストには2017年分以外の動画もアップされているので、そちらもご覧いただければ幸いです（注：自然遊学館研究員の投稿によるもので、自然遊学館公式チャンネルではありません）。

以下に、今回の12本の動画リストを記します。①和泉葛城山のウグイス、②和泉葛城山で採集したカタオカハエトリ、③中部水みらいセンター寄贈のウナギ、④二色の浜産のゴンズイ玉、⑤二色の浜産のチャイロマルハタ、⑥行事で採集された近木川のアユ、⑦汽水ワンドで採集されたヒナハゼ、⑧近木川河口の鳥、⑨二色の浜産のオヤビッチャ、⑩近木川河口のビンズイ、⑪貝塚市のキノコ（2017年）、⑫貝塚市の植物（2017年）

3. 寄贈標本等

脇浜住宅跡地で発見された約 80 年前のものと思われる貝殻標本（西出康介さん寄贈）、大阪府立佐野高校生物準備室からの寄贈標本、塚口茂彦氏寄贈のコウチュウ標本、汽水ワンドの水生物標本、2017 年に貝塚市内で採集された昆虫標本、自然生態園「トンボの池」から羽化したトンボの羽化殻を展示しました。また、2016 年に西村恒一さんから寄贈を受けたチョウ類標本も、これまで少ししか紹介できていなかったのので、その一部（アゲハチョウ科とタテハチョウ科）を展示しました。



脇浜住宅跡地から採集された貝殻標本
（寄贈・作製：西出康介）

4. 海の学びミュージアムレポート

2017 年に海の学びミュージアムサポート（日本財団）から助成を受けて行った行事は、渚の生きもの（5 月）、二色の浜稚魚放流（6 月）、海につながる山の話（6 月）、二色の浜アマモ観察（7 月）、水産技術センター見学と磯の生物観察会（7 月）、京都大学白浜水族館見学と番所崎の生物観察会（8 月）、近木川河口のカニ釣り（9 月）、海藻おしば製作 & ウミホテル観察（10 月）、岡田浦漁港見学 & 親子海釣り（11 月）でした。



海の学びミュージアムサポート事業報告

それらの行事の様子や学びの成果、アンケートは、「海の学び報告展Ⅰ」（5 月 28 日～6 月 25 日）、および「海の学び報告展Ⅱ」（12 月 3 日～2018 年 1 月 28 日）として、2 回にわたって報告してきました。今回の 2017 年の出来事展では、それらのダイジェスト版を展示しました。



渚の生きもの



白浜番所崎見学



岡田浦漁港見学

以上、特別展「2017 年の自然遊学館の出来事」において展示した写真、動画集、寄贈標本等、海の学びミュージアムサポートの活動報告などを紹介しました。

付属資料. 2017 年の自然遊学館の主な発行物

「貝塚市のカタツムリ ― 貝塚市に住む陸産貝類」(児嶋 格著、岡村親一郎監修)

2017 年 3 月 1 日発行

「海の学びミュージアムサポート資料集 海の学び活動の中で見つけた生きものたち (近木川河口干潟を含む)」 2017 年 3 月 31 日発行

「貝塚市立自然遊学館報 No. 3」 2017 年 3 月 31 日発行

「自然遊学館だより No. 82」 2017 年 2 月 6 日発行

「自然遊学館だより No. 83」 2017 年 4 月 30 日発行

「自然遊学館だより No. 84」 2017 年 8 月 14 日発行

「自然遊学館だより No. 85」 2017 年 11 月 20 日発行

「貝塚の自然 第 18 号 ― 貝塚市立自然遊学館研究報告 ―」 2017 年 8 月 31 日発行

謝辞

本特別展の展示標本や展示パネル作成などの準備、および展示デコレーションに協力いただいた西出康介さんに謝意を表します。

右の写真は、大阪府立佐野高校生物準備室からの寄贈品のタコつぼに合わせて、西出康介さんが作製したタコの模型です。その他、キノコの展示写真や動画に合わせてキノコの模型も作製していただきました。



タコつぼとタコの模型